12・1月の移住者交流活動報告

12月の移住者交流スペース 昨年12月17日(日)10:00～17:00

底土客船待合所3F交流フロアにおいて、移住者交流スペースを行いました。今回は時間長めに実施しましたが、ご参加は20名ほどで、すでに交流関係が築けている方が多いことを実感しました。次回は新規移住者が増えた4月か5月頃を予定しています。開催予定は移住協のXアカウントとスーパー等に告知を掲載しますので、そちらをご覧ください。

新潟県人会 1月26日(金)19:00～

中之郷の居酒屋「聡福」で、新潟出身の歌川理事長を含む13名＋聡福の常連や関係者8名で大いに盛り上がりました。寒ブリは欠航のため届きませんでしたが、加島屋の惣菜、へぎそば、タレかつ丼などの料理と新潟の日本酒が多数並びました。寒ブリが獲れる3月上旬までに次回を開催予定です。

求 空き家ご提供のお願い

八丈島では移住したい方々が住むお部屋が足りていません。そのため、八丈島移住がスムーズに行えないケースが多々あります。八丈町の人口減少が深刻ないま、空き家・空室不足は非常に困った問題です。

島内に空き家をお持ちの皆様、どうか皆様の空き家を八丈町のためにお役立てください。先祖伝来の家屋を賃貸したり売りに出すことに抵抗がある方が多いかと思います。しかし、家屋は住まないでいると数年で廃墟のようになります。その前にどうかご決断ください。空き家を待っている将来の八丈島民のために、よろしくお願い申し上げます。

発行元・文責 NPO法人八丈島移住定住促進協議会　企画・編集：畑中 由子　デザイン：ハスネWebDesign

TEL 070-8310-7405（営業時間 10 時～ 18 時）　MAIL 8joiju@gmail.com
ADDRESS 東京都八丈島八丈町三根 4906-3（みんなのひみつ基地内）　URL https://hachijoiju.com/

八丈島と人を「つなぐ」移住定住のための会報誌

八丈島ぐらし通信 26

2024年1・2・3月合併号

写真提供　吉田登志さん

『ヤブツバキ』イラスト：氏家 美香（宮城県出身）

特集 **あのころの八丈島**

移住者が知らない八丈島 **八重根の地蔵講**

今月の島ごはん

大沼先生ご夫妻の 山形風芋煮

【材料】
里芋・牛肉・こんにゃく・ごぼう・舞茸・長ねぎ

【作り方】
①牛肉の薄切りを鍋ですき焼き風に醤油と砂糖で炒め煮します。
　※山形の人は「味マルジュウ」という地元のだし入り醤油を使いますが、お好みの醤油や麺つゆをお使いください。
②牛肉に味がついたら取り出し、その鍋に水を入れて、皮をむいておいた里芋・こんにゃく・ごぼうを煮ます。
③里芋が柔らかくなったら牛肉、舞茸を加え、酒・醤油・砂糖で調味します。
④よい味に煮えたら斜め切りにした長ねぎを加え、火を止めて蓋をして蒸らして完成です。

大沼匡平先生は八丈高校内にある「都立青鳥特別支援学校八丈島分教室」の教師です。八丈島素材の七味唐辛子を生徒たちと開発して製造販売。生徒たちと陶芸室で不定期開催するカフェ「チルチルミチル」は長蛇の列ができるほど大好評で、優れた企画力の魅力的な授業をなさっています。

ご夫妻ともに山形県出身で、移住協の山形宮城県人会にも参加されています。この日は横間海岸で、青鳥と八高の先生方の芋煮会でした。山形の郷土料理である芋煮は、八丈島の里芋で作ると最高のおいしさです！

特集・八丈島の歴史

あのころの八丈島

島の人たちが「よかった」と懐かしむ「あの頃」の八丈島を写真で振り返ります。

「あの頃はよかった」という言葉を聞きます。八丈島でもご高齢の方々から度々発せられる「あの頃はよかった」。「あの頃」とはいつのことでしょう?朝日新聞社が2015年に行った「戦後日本が一番輝いていた時期」を聞く世論調査では、「高度経済成長期」1955(昭和30)～73(昭和48)年頃(58%)と「バブル経済期」1986(昭和61)年～91(平成3)年頃(17%)を挙げる人が多かったそうです。

高度成長期の八丈島では、東京オリンピックの翌年1965(昭和40)年の来島者数が約5万人。その後の離島ブームに乗り、来島者数は年々増加して、1973(昭和48)年には21万人を超えました。全日空の飛行機は1日7往復していた時期もあります。しかし、80年代になると沖縄をはじめとする新たな観光地が脚光を浴び、海外旅行が手軽となり、八丈島の観光は低迷期を迎えました。

1 吉田南光園
現:ポットホール

観光客が入りきれず食堂は奥に建て増しした

岐阜県から家族とともに八丈島へ移住した吉田貫三さんは、1932(昭和7)年に実家の印刷所を八丈島へ移転して、戦中から戦後と「南海タイムス」の発行を継承します。その後口ベに着眼し、護神山の隣に「花と植木のデパート吉田南光園」を興します。1955(昭和30)年頃に道路側に建てた珊瑚加工とお土産品の売店は観光ブームとともに繁昌を極め、二度の建て増しを経て、現在もその姿は残っています。

貫三さんから吉田南光園を受け継いだ長男信男さんの意思により、売店部分は「人が集い楽しめる施設にしてほしい」と売却され、ライブハウス「ポットホール」に生まれ変わって現在も様々なライブイベントが行われています。

あの頃の観光スポット

観光バスで郷土芸能や牛相撲、園芸温室を見て、吉田南光園でお昼を食べるのがコースだった

立ち見客でにぎわう服部屋敷

中之郷自由ヶ丘の牛相撲

三根バンビの郷土芸能

2 八丈島流人まつり

1967(昭和42)年にスタートした第1回八丈島流人まつり(8月28日から3日間開催)。島をあげての仮装パレードが賑やかに行われました。その後は「流人まつりシーサイドフェスティバル」として形を変えながら1995(平成7)年の第29回まで続きました。この頃には花火、ステージ、ミス八丈島発表などの内容で、翌年からは商工まつりに吸収されたようです。納涼花火大会が独立して開催されるようになったのは2000年(平成12)年です。

大賀郷小学校での流人まつりの記念写真

島内の様々な団体が凝った仮装で
坂上から三根まで練り歩くパレードは
いまも懐かしむ人が多い昭和の大イベント

護神交差点でパレードを見物する人々

▶当時大人気の高見山関がゲストに来島
高見山関は八丈島と姉妹島であるマウイ島出身
この辺は大賀郷の商店が立ち並ぶ商店街だった

◀三根小前の交差点付近

現在の南原野球場あたりに作られたフリージア畑

3 フリージアまつり

大正時代に栽培を始めたフリージアが盛んになったのもこの頃です。1967(昭和42)年には「フリージアまつり」が始まり、品種改良が積極的に行われて、国内トップシェアを築きました。しかし、90年代にはオランダからの輸入が増加して消費者のニーズが多様化し、球根栽培は大幅に減少。春先に島のあちらこちらに見られたフリージア畑は姿を消して、現在は町が運営する摘み取り用花畑が中心のイベントとなっています。

1988(昭和63)年まで現町役場庁舎に作られていた摘み取り・鑑賞用のフリージア畑は、89年に八形山に1万坪のフリージア畑を整備して移転。91年には南原近くの赤石山へ移動したものの塩害と台風で栽培がうまくいかず、1年で八形山へ再移転されました。

4 ホテルロイヤルの結婚式

◀川上絢子さん（84歳）の結婚式はオープン2年後の1965（昭和40）年3月にホテルロイヤルで行われました。新しいホテルでの結婚式は当時のブームとなりました。

▶川上さんのご実家は旧中田商店です。結婚式の朝に出発する一同と見送る人たち。左には当時の映画のポスター。

高度成長期の真っ只中、1963（昭和38）年に開業した「ホテルロイヤル」は、白亜の宮殿のようなたたずまいで、これからくる観光ブームを予感させ、八丈島民を興奮させました。1ドルが360円の時代です。気軽に行けない海外旅行の代わりに、「東洋のハワイ」のキャッチフレーズを付けた八丈島には新婚旅行客が続々と訪れ、スーツ姿やアロハシャツの来島客であふれました。沖縄が本土復帰を果たした1972（昭和47）年までは、八丈島が国内で最も注目されるリゾート地だったのです。

八丈島の観光ブームを象徴するホテルロイヤルは、その後、プリシアリゾート八丈、八丈オリエンタルリゾートと経営が変わり、2005年（平成17）年に閉業しました。

次号予告

八丈島のホテル建設は1959（昭和34）年開業の「八丈温泉ホテル」（樫立）から始まります。その後、1963（昭和38）年に「ホテルロイヤル」（三根）、1966（昭和41）年に「国際観光ホテル」（大賀郷）、1975(昭和50)年に「八丈島大洋ホテル」（三根永郷）、1976(昭和51)年に「八丈ビューホテル」（大賀郷）と大きなホテルの建設が続きました。

次号では、当時の八丈島の華やかさがわかるリゾート感あふれる各ホテルのパンフレットをご紹介します。

八丈温泉ホテル

国際観光ホテル

八丈大洋ホテル

☆ 旧中田商店　宇喜多秀家跡地の前面に鮮魚・精肉・パン・雑貨の中田商店がありました。

▼旧中田商店の道路の向かい、衣料品の周蔵商店前で花嫁道中を見送る人たち。

☆ 浅沼周蔵商店

5 昭和のお店

ネット通販もない昭和の八丈島では個人の名前を掲げた商店が元気でした。食料品店は月末締めで買える帳面があり、量り売りがあり、お互いの信用の元、融通を利かせ便宜を図る人と人のやり取りがありました。衣料品店は田舎のデパートのような趣で、買物に行くことを楽しみにする場所が島の人々にもあったのです。

☆ 雨森商店（あめのもり）　▲雨森昭平さん（写真左から2人目）が全日食チェーンの食料品店を創業したのは1979（昭和54）年頃でした。1985（昭和60）年の写真です。現在の駐車場の場所にお店がありました。現在の店舗になったのはいまから約20年前です。

☆ 富次朗商店

▲二代目正一さん（写真前列右）が1940年代（昭和10年代後半）に現むかしのとみじろうの場所で営んでいたお店。

◀1980年代（昭和50年代後半）三代目富治さんのお店。その後、現在の場所に移転して、四代目の唯さんがお店を守っています。元の店舗は「むかしのとみじろう」として現在も利用されています。

☆ バンビ

1965（昭和40）年頃～1975（昭和50）年頃まで営業していた「バンビ」（ダンスホール）は「ナポリ」（現在も営業）と共に、青年団の出会いの場としてにぎわい、多くのカップルが誕生しました。マスターの山下護さんは「民芸やました」の巧さんのお父様です。黄八丈サブレバンビ菓子工場の名前の由来です。

▼現在のバンビ工場。

今回の特集にあたり写真と情報の提供をいただきました。

南海タイムス社、吉田登志さん、吉田繁夫さん、川上絢子さん、富次朗商店さん、雨森商店さん、山下巧さん（順不同）他、お名前を掲載できない方々からもご協力いただきました。ありがとうございました。紙面の都合で掲載できない写真もたくさんありました。また、フリージアまつりに関しては、「八丈島フリージアまつり」ホームページのヒストリーを参照しました。

昔のことで、年代や正確な情報を調べるのが難しく、間違っている箇所があるかもしれません。また、写っている方々にはすでに連絡がとれず、掲載許可をいただいてないものもあります。現代の人たちが知ることができない八丈島の歴史を共有することを優先しましたので、お許しいただきたく思います。

八重根の地蔵講

他の地域の人にはほとんど知られず、八重根（千鳥）でひっそりと長く続いているお祭りがあります。千鳥地区に2ヶ所あるお地蔵様をお参りする地蔵講です。高齢化で集まる人が減り、一時はこのまま消滅してしまうかと思われた地蔵講は、高齢者が係を若い人たちに渡すことで世代交代がなされ、息を吹き返しました。

地蔵講は全国各地にあるお祭りですが、八丈島ではいつから始まったのかわかりません。高齢の方々の話によると戦前からあり、昭和30年代頃までは島内のあちらこちらで行われ、映画や演劇、相撲なども行われていたそうですが、現在残っているのは八重根の地蔵講だけです。

昨年の12月2日(土)午前11時から地蔵講が行われました。宗福寺の源住職が千鳥の2ヶ所のお地蔵様でお経をあげ、地域の人たちがお参りしてお酒とお餅をちぎっていただき、その後はお地蔵様横の空き地で宴会が行われました。

宗福寺住職
源 博道さん（73歳）

地蔵講とは

地蔵講はお地蔵様をお参りする日です。お地蔵様は「六道能化」といって、地獄界・飢餓界・畜生界・修羅界・人間界・天界の6つの世界をぐるぐる回りながら、救いから漏れた子供たちを救いとる仏様です。それが転じて、お参りする人たちの健康や家内安全の祈願を叶えてくれるという信仰です。

八丈島では、仏様の祭りは地蔵講と大賀郷の薬師如来の祭りの2つだけです。昔は娯楽がまったくなかったので、そのようなお祭りは、考え出されたものというより、人々の心の叫びが必然的に求めに応じて形を創っていったものと思われます。地蔵講は日本全国にあり、行われる時期は様々で、その地域の必要性に応じた時期に行われるものです。

お地蔵様の周囲に置かれた小さな玉石は、漁の無事を祈り積まれたもの。昔はこの玉石を漁の重りに使う人もいたそうです。

お地蔵様のよだれかけは地域の人が縫っています。お供えのお菓子は子供たちに配られます。

わたしの地蔵講

わたしのお地蔵様は大賀郷の稲葉にあって、初地蔵の日に「地蔵講」といって拝みに行きます。昔は餅をあられに炒って配り、お菓子もない頃だから、大勢の子供たちが風呂敷を持ってもらいに来たけど、いまは来なくなりました。だから汚れないように袋に入った煎餅を置いてきます。

昔は八重根の地蔵講では寒い時期に映画を上映して、寒いけど観るものがない時代だから半纏を着てみんな観に行きましたよ。何十年ぶりに八重根の地蔵講に連れてきてもらい感激しました。

川上 絢子さん（84歳）

西浜 聡さん　廣江 篤夫さん

地蔵講を受け継ぐ

昔、地域にもっと子供が大勢いた頃は、相撲・映画・紙芝居とかいろいろやっていたそうです。だんだん子供が減ってきて、地蔵講をやめたことがあって、そしたら疫病が広がり、復活したと聞いています。自分はあまり興味がなかったのですが、高齢化でやる人がいなくなり、頼まれてやってみたら面白くて、みんな来てくれるから、いま現在は細々とですが受け継いで、やれる人たちだけでやっています。